

訪 朝 印 象 記

IWRB 日本委員会委員長 松 井 繁
日本白鳥の会会長

朝鮮対外文化連絡協議会（以下・対文協と略）と生物資源保護センターの招待で、日本野鳥の会が訪朝団を結成した。私はこの一員として黒田長久日本野鳥の会会長、鶴の写真家の林田恒夫氏、朝鮮大学の鄭先生と共に、3月29日から4月2日まで朝鮮民主主義人民共和国（以下・朝鮮と略）を訪問した。なお黒田会長と私は都合で4月2日帰国し、他の2人は4月6日に帰国された。

主な目的は鶴と白鳥を見ること。特に鶴は今春鹿児島県の出水（イズミ）で小型発信器を装着（これを人工衛星で追跡することにより、渡りのルートを観察する）した3羽のマナヅルを直接確認したいという大きな目的があった。対文協と生物資源保護センターの皆さんの協力で、着標されたマナヅルには会えなかったが、目的の鶴、白鳥を観察することができた。更にピョンヤンの街、地下鉄、動物園の見学など実りある訪問となった。以下朝鮮見聞記を日を追って書いてみよう。

3月28日、成田から北京に着く。北京の朝鮮大使館へ行きビザを貰う。隣国でありながら、日本でビザは貰えない。それは国交がなく、日本に大使館がないからであり、中国経由でなければ朝鮮に入国できない理由である。

3月29日、北京からピョンヤン空港に着く。対文協の人たちや生物資源保護センターの所長の朴先生が見える。親しみの感情が流れ、異国にきたという感じは全くない。また宿舎のピョンヤンホテルのメイドさんたちも日本人と同じ顔だちの人が多く、私はつい日本語で話しかけ、日本語が分からない(?)という答えが戻ってくるのが度々あった。言葉もハングル文字ではなく、漢字で書いて発音を説明してもらおうと、日本語の発音に良く似ており、理解し易い。

夜には対文協主催の歓迎の宴に出席する。副局長が挨拶されたが、日本で発信器を着けたマナヅルの現在の位置など、よく調べておられ、大変暖かい雰囲気であった。

3月30日、生物資源保護センターの朴先生初め、動物学会、動物関係の研究所の方々との座談会に出席した。私も日本の白鳥のおかれている現状、特に給じ（餌）の問題について話をした。朝鮮では白鳥はじめ、他の野鳥も給じ（餌）は受けていないが、よく保護されていた。金日成主席は開国以来自然保護については特に留意され、そのため国民の鳥獣保護の意識は高く、全土が鳥獣保護区であり、その中に僅かに狩猟区があるのが現状である。まことにうらやましい次第である。私は九州の柳川で高い木の上で営巣しているカササギを見たことがある。けれども朝鮮ではあちこちで、例えば路傍の木の左程高くないところで営巣している。午後遅くに着いた安州のホテルの周りのポプラの木には数ヶ所で営巣しており、夕暮には十数羽のカササギが群れていて、私たちは夢中で撮影した。

この日、地下鉄と動物園を見学する。ターミナル駅のプラットフォームは広々としており、また大きな数基のシャンデリアが輝いていた。更にホームの両側の壁に小さなタイルで作った高さ6m、幅80mの大きな美しい壁画があった。地下鉄は撮影禁止だろうと思ったが自由であり、次の駅まで試乗させてく

れた。動物園は広大で、札幌の動物園とは比較にならない。一番嬉しかったのは朝鮮の虎が教頭いたこと、そして更に嬉しかったのはまだ北西部の深山に生息しているとのことであった。

3月31日、安州のホテルから西南方の東林里へ行く。ここでは朴先生が派遣してくれた2人の研究員が鶴の情報を教えてくれて、彼らが案内してくれた。馴れた眼でマナヅルを3羽発見してくれ、林田さんは撮影することができた。更に研究員の方は、この上を午後5時半頃ねぐらへ帰るナベヅルの大編隊が通るといので、出発を延期し、5時50分まで待つがあきらめて帰途についた。ところがその路上で夕映えの中を飛ぶ122羽の大編隊に遭遇した。感激一杯で馴れている筈のカメラ操作もままならなかった。林田さんは大喜びであった。

4月1日、朝早く大同江河口の西海水門に行く。途中南浦郊外で140羽、西海水門の近くで60羽のオオハクチョウを見ることができ、撮影した。案内してくれた朴先生はじめ皆さんが、昨日は林田さんに鶴を、今日は私に白鳥を見せることができ、安心したと喜んでくれた。

昨日の安州への道、今日の西海水門への道もきれいに清掃されている。ピョンヤンの街も同じである。道路は広く整然としており、あちこちに大きく立派なモニュメントが見られ、なかなか近代的な美しい街である。

午後冷メンのおいしいレストランに案内された。大きい宮殿風の建物で朝鮮の人たちで賑わっていた。鄭先生推薦の店であったが、おいしく、私はお替わりをした程である。

この後、対文協を表敬訪問する。この時副委員長から我々に金日成主席からの贈り物を頂く。一国の主席からお土産を頂く光栄に浴するというは私にとって初めての終わりであり、身に過ぎたものと恐縮している次第である。

私どもの最後の行事、答礼の宴は市内のホテルの日本レストランで行った。鮭、てんぷら、刺身など朝鮮産の魚介類は新鮮でおいしかった。

4月2日、帰国の日、忘れ物の名人の私を心配して、朴先生が、ベットの毛布をはらってみて先生、忘れ物がないね、と云ってくれた。

私が接した朝鮮の人々は皆心が暖かく親切であった。街は清潔で美しく、自然保護の行き届いた国であった。この朝鮮と我が国が早く国交を結び、また南北朝鮮の正常な国交が開始され、より効果的な文化的その他の交流ができることを心から切望するものである。

最後に対文協、生物資源保護センターの皆さんに心から謝意を表す。

以上は朝鮮画報社の依頼により寄稿したものである。朝鮮民主主義人民共和国という国が、また同国の鳥のことなどがさっぱり知られていないので、朝鮮画報社の転載許可を得て報告する次第である。同社に謝意を表す。